琉球大学学術リポジトリ

大和歌集

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション：琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内（みやらどぅんち） キーワード (En): In Collection: The Miyara-Dounchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: -, 2009/6/5 16:51 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6233

大和歌集

（一九三二年十一月十四日記入）

河道光二年十三年

西表首里大屋子一十嶋十熱の思

用紙二拾枚　當番

松岸姓

當歳拾四　宮良筑

大清道光二十七年丁未四月吉祥日調之

と申なし

一 吉田のおやち為経はさうく浮世に

きはりくさかいてゐたしこ

との申

一 山名氏清氏ハ畳氏明徳ハさうこえ

於小社宮にてまつりたし候との
御事

一 渡和田綱乃兄と綱大い山なる
鬼神のかいなを切て手柄立申
御事

一 渡辺綱ハ八幡山にて君か代為ニて今も
うまくし谷地ハ末代迄ほとし御事

一 渡辺綱新発意ハ大江山なる鬼神の難し
之れ也と為くとされる兄弟御事

一 御先祖旧関八幡にて源氏ハ平家ゆ武士

此外さしかいさいこそ一巻て年成
給御申

一 曽我の十郎祐成ニてい候て
おいそのとらにあひしことこそ名高かる
御申

一 佐乃重くのたくのゐハまし六成
継くたるそけんたなきつねのたちこの
ことりい御申

一 霧屋の姫鶴ハ若くて命見てく
松中ハ諸て討しれ三つらある事くれ

同中｜

一 花盛は雅なねしつこに落手は

けちさこ新火は縁てもはとこゝやる

引しこの同中｜

一 大坂こえ登昇天下まつりはこえ道上る

松山の月ひとことは光ひとつこゝへは

同中｜

一 東は海辺は紅葉ちりぬひとなれん

こゝのこゝちゆくひよる風ならぬまもなかさ

なる同中｜

一 波け石打こと、なまりハまなれしハ、
罷次郎さんこあけて取りて
留り申ヽ候
一 指三郎ハ見臺振ハ廉成ぐるし
こ見はたくとよりへくとハあらこそ候
はく候
六十二
一 四海波風治まる御代こそ目出度と見える
三宋 搭八
一 よしやした悪さはけハかせる

一 桜ちりかゝる

一 花はさかりに月はくまなきを
けのみ見る物かは

一 花はちらんとも月もちらす捨て
月もかゝる前もあゐる

一 梅に鶯こゑりいはひさく花もちく
せんす京の春よ

一 咲初し濃梅の花咲かちあまし
鳥風もちをするなんさ
うきの花のちりとも花ちらちんて

とかりの松かせ

一 萩ハ桜や白し梅にまさるなるらん
いとゝけきて

一 あひてのちこそ恋ひいふらしくるか
色まさりましかん

一 君は鶴亀こそ万代まてなりたる花よりも
これは松かえや

一 君そ我こそ来のよ此殿よりも増也
よよみかしよ

一 いとなれくに沖に落舟は無息もかはるなるらん

硯之事也

一 墨ハ古キを知るへくの金有限なく
墨揩可し

一 唐の毛筆青葉のやうなく思ふ云
草の色さへかも知れ

忌て可知し

一 天下安く治る御代には銭多く
ほのさハえてく都まするみよこそ
閑居破れ

一 色々かはりなし 嵯峨の名及び思

とて様済にあるへきにてしやの
ほうみや
一 青物てあるとの大難にはくとなんこ
こゝめてとつらしやすり風せん有てら
痛にて用ゐるさえし

一 説也香あらいくいさん春はるし
てかさとむらのん春くはさとさ風ねら
さいし　　拝い
一 焼ひらくとらひかしこえはしことゝ尋かし
足やらりやせんいすそいふはの物そも

一　ゐるこくにかゝるとはるゝとして一つハ哉
物さこひとつ月にて人はなはつハ前に成らは思ひ
叶
一　夕顔ゆふみしもうちきこえるみえて
おもひの夢の蘭のかゝるこえしの宝也

餞りし口し
一　つましくなこいふところなゝあるなし
なお出そなくあくなかはなれかりしなる
書也ときち
一　この衛門に朝しるなりかへとなかき

うたたよりしきしハ壱の初めくらあそ
云ひ候
一 銚子のくちハ三方そでみしりあこう
かんそうハ浅と硯箱に一枚ならへ候也
ともなちとも

侍らんかくしかし
一 言ハむかしハなくしこみ舟はさかさ
よそ何事ハ御さなし
一 言ハ飯箸御ひろうハきそへよ定也
あらし御いとなみかし候よ

一 こよひ契をちらんにつゝとうらかに女も風情とも
ひるさへかゝめハめてし

一 舟より出さハ夜船ことしりうちと
つねよりハかそうかや

一 語七字なとにハはの文字さこそ心也

たゝまそりにたちてあり
かうりかし

一 こんれいなとにハ喜事をはゝくてく
まそこくこんれいにもとゝり

一 ひんのかうまへにしてつ枕かうによりまゐらす

をんさうしの友

一 はしやおもしろきさとのしかしそれ
よしわらをたのしちそめまゝ
夕倉ひ

一 文台に向ひ東海の書ぶりは今村乃

おもしく露風を添く

一 飛の立東浦のさまの山衣のくと波く
誰をしり雲の香く

一 兜はしせきとらの陰もうしさり
かけそ残くゆくらすく吉き栴の香く

一　みるさへあはく照ねかひ色をもしらく
いはせからは此それやさていさか付り
てよ代のみるかなん
よそのこ
一　よそくろこめしもへかこ三字迄

やま里のふかハさかいふし三字まり
みる道にも山人命堂ハ夢し候り
てんの雲くらハかなし三字の
それかさにハかけかけ月の世
前ハ物のむめの花色のかくつ三字迄

せん人のかざしにおりけるハおつるなれ
霊亭もやりたなめ(の)ありしを
りくこおちこちの里ハあをとし
白菊のましとの(ゆ)ふ露百(なか)や

ちくし
一 花の香にみかのこゑひとつ波こそ

なかなかにまよふまでの月ハ此所なる
まくるりこんかりのよいまくらくこ

羽衣

一 君が代ハ天の羽衣まれにきてなつ
きく月乃宮居ハ(ありし)たかき(ありり)

あまの萩あきにとる松風くるしき
恋をしつゝいさゝかみやこしの御おもひ
涙しおもひそへてなきこゝろこそあれなる
かけなりけらく

一　あきこの月めくりのあはれもなし

実花のいろめくは露の心もしらす
我涙にさりは涙をうけし夜こそ
白露としこそあれなりて雪残
契らるこそ夜のあるの袖もさしむかふ
のおもかけもなく

一 こよみかへし春の日さしよりむれは池に
静かにあそひにせかいすみあの雨こゝ
いはゐいしたゝこそおりおいてかきえ
の梅鶯は花ともちらしして南きつらし
しる意をせんとんの端のかたさきく

一 袖なとのむかし ねをさしくらへ
て衣はにも 雲のつゝくいち暁に春よ加を
めあはそりしてめほしかものあかりこ
の花ゐりをおもりし 花のわかれさの
らそて 花にはふこすにはふもひさつそを

根さし路や柳の松

一　あるとく禄んしおまいこひろとけきさ
うけは古縁やとひの公めを若水の雫を
の路にこそ路ほね京そめらそし
め胡ん色はその清は流れも　らも好み世き

冬のとの縁結は恵ひはにいらくいへき
花やかなぐさりとあまりあるにひ
さるしのことはさあられら有れる
あくむかいこよの長銭内はちら笑き
爪ふめかのあんめかくこのとはゝ給ふらんそ

これ迄しの式めさうしの來客
く芸竹かなうにおさまりての主人波
風を治る御世として目出度けれ
小袖着物なり
一 かゝ有りて此事を御祝に載するく

あこひ申す安民を整へ金持者
祝はしきかくにも安心不常こなしさ
当光の手法之しりけりこかへ
て能り此様しきうく親のよに小を
こう姐らく皆ひいさく続し御祝して

さしもそ深りける世人ゝのこゝの
中法しとてこの中しく申ハらハ
あらかりけり
実教道けり
一 実教也猶しれハ去の為は身りハ身の

今の為也しもしかうしは経よりも本の
の色のあらきへく経教学くき
ますていて教ハ如きしありしー
経教この此学ありしの後をさみさり
けられん如蘭の教如りハこの庭さし

こゝかしこにさまよひもとめけれハこゝにおはし
てましまし候へ
一 中比の武蔵守平ハあしたかの湯に
桜をこよひのあるしとて夜をあかしてのくしたまふ
てかりの宿とせりしをおもひくらす月

住わし花さくハ雲の林乃
にのこる楊柳にふかく風をしてたく
たりける人のくさくと言のこし
このし国とさへかうきて君あらは
うつの宿より出へさしなりく

國中に於て善ぬりて御行さハ
ちハ海ら寄り情しゆさてちゆ
蓬莱の春し尾張の國熱田乃宮さく
れせんいして夢さし君我三川の
まんほくまてのうき旅さ消ハ積て

御まこ前して吉の京へ赴給くあまほく
日数を小車誌ひらし華も重る
ありもあり玉り帰くなく乃命
ハこうきふひりいうし蔵ホノ四ハ冬れの
いよいら夢なりく笑しれておさいけ

海道をくたらむ月日ハ三とせにて
なれにし浮世の都をハ遠さかる路の
ハなるゝかなしさの古郷も見あ
たりも雲のいつくより立煙行末も
あらしいはの松三嶋の神の箱

根山路をさかり行程もなけれは
さりし霜しさあハ旅さかり旅をに
過ても名残の国府津を行て見え奥新
こいそ大磯やこゆるきし川の関の
あとかよひまそてまろくもなとこれ也くにかた

ちり來るものは運のかたまりなかし

枝笠

一 見わたせは海漫々としてきはもなし
夜のくれは滄溟に小舟せんまはりけ
り櫓の音はかりしつゝかなたよりて漕出

別てくいろくをくらうさつ波にはなし
れ流くるゝをせてさて雪白出
涌めかり積くゝるさてまの飛椋
をたよふところつくしそ
小つくこのたきさおりやこそのまてま

しきし中に源氏の絵にも風た
さうさうを定家流に花乱くさん
らんし内しきにゐてこそさてそとく
なりしこそたいせん所にしみかわ
てらる瀧の水布をひくうちあ也

せまるきしくたくまふこゝみさく
はあいだをまさむらと押しとゝたつさき
しるしの所に物ありかくとし
尖ことすれどをと今の御しは
ほゆとてこれへくまし不也くとそ

湊浦と云所あり
云ふ清水道行
一 其外九重ニ鉢を渡しと云ふあ
相ふ風声ある聞しむしなかりけれ
心まよふ候様也御覧候て候はゞ御移りし

一 小侍従にし添ふ日ふの時ひ誰か有はく
さきの春也みなことはもさらに私にし
此時物ふ此物をとし云ふ浦
のやまと云ふ名ありて和歌の
おしつたへ候ゑまても候はん浦辺に向け

さかたまてしみことのかおはせのけん
そのはましたをひかされしかな
せんかかへし
一 せんかおそりはたはちまゆるちし
えてしみせえくりてせかくふ

かられくいやんまの
一 あいは七福しれ高れくことるほとか
なさけの小福しし
一 おそりおそいもいふまくおそりいふ
まれれはよみすことぬる

一 おしへたまひしところた一つひたち
御たち若か性にてく
さつまうへし

一 めてたくこよ春まで梅よ枝し
きこひて候よしせけらく

一 梅ハ百返にて候へ九ら語九つ入 まいらせ候
白髪のちまよる所く

一 七月五日しすのまいらせ候 逢ひて候
ちやつらくるく

一 梅にて候ちハ桜にて候ひうんさくらていと

さくらあいけんさにふたつのかく
かまりぢんをとりちりやさて
一 鞠せなく思ひすぐしてはて鞠は
みはさみなんまくしてさて一んら
をさのやてをまく

一 こをりせなく鞠をつくしてせいう
せりいをみはうたのこまくる
そうひちかりやをけて

一、家附中[illegible]闕[illegible]宮[illegible]

[illegible]被[illegible]

[illegible]文

[illegible]

[illegible]

子丑庚

申大濱和三郎持之

大和の集終り

富良助